

作成者：佐々木めい

作成日：2025年8月22日

ご挨拶

皆様、初めまして。福井県立大学にて経済学を専攻しております、佐々木めい（ささき めい）と申します。

このたび、2025年度福井県奨学生として、アメリカ・オハイオ州にあるフィンドレー大学へ留学する機会を頂きました。まずは、このような貴重な経験をさせていただけることに、心より感謝申し上げます。

国際情勢の変化が激しい中、福井県国際交流会館の皆様をはじめ、フィンドレー大学の先生方、そして多くの関係者の方々のお力添えにより、無事に渡米することができました。多くの方々の支えがあってこそ、今ここに立てているということを強く実感しながら、これからの留学生生活を充実したものにしていきたいと思っております。

【自己紹介】

私は福井県生まれ・福井県育ちで、現在、福井県立大学の4年生です。

約2年前、フロリダ州で約1か月のホームステイを経験した際、日本や地元・福井について質問されてもうまく答えることができず、自分の知識不足を痛感しました。その経験をきっかけに、大学に戻ってから日本文化や宗教、そして地元・福井について改めて学び直すために、関連する授業を3つ履修し直しました。

その中で抱いた学術的な疑問や学びの楽しさが、今回の留学を志す大きな原動力となっています。

【フィンドレー大学での生活】

左の画像は、1週間ほど前に行われた入学式の様子です。

日本のような格式ばった式典とは異なり、簡単な説明の後、教授陣が並んで歓迎する中、学生たちは「アーチ」と呼ばれる門をくぐりました。このアーチを内側から外へ向かってくぐるのは、卒業時のみとされており、とても印象的でした。

今学期は、各国でビザ取得が難航している影響もあり、まだアメリカに入国できていない留学生も多くいます。そうした状況の中、こうして無事に現地で学んでいることに深い意義を感じています。

キャンパスは非常に広大で、日本の大学ではあまり見られないような施設も整っています。特に印象的だったのは、チャペル（教会）、ゲームプレイス、そしてビーチバレー用のサンドコートです。

アメリカでは、キリスト教を信仰している人が人口の約6割を占めていることもあり、キャンパス内に教会があるのは珍しくありません。私は文化交流の一環として日曜日の礼拝に参加しましたが、皆で賛美歌を歌い、何かを信じて祈る姿に心を打たれました。

また、学生がリラックスして過ごせるよう、任天堂Switchで遊べるスペースや、砂を敷き詰めた本格的なサンドバレーコートなど、ユニークな設備も整っています。



【オリエンテーションウィーク】

セメスターが始まる1週間前には、新入生向けの「オリエンテーションウィーク」が実施されました。

主な目的は、新しい環境に慣れ、友達を作ることです。そのために多くのアクティビティが用意されており、私はその中でも特に「ムービーナイト」が印象に残っています。

日本でも人気の映画『キューティ・ブロンド』を、キャンパス内の広い芝生の上で鑑賞しました。無料のポ



ップコーンや飲み物も配られ、友人たちと穏やかで楽しい時間を過ごすことができました。

【アメリカンフットボール観戦】

ある金曜日の夜、地元高校のアメリカンフットボールの試合を観戦しました。

画像では赤と白のチームが写っていますが、赤のチームが地元・フィンドレーの高校チームです。私たちインターナショナル生も、英語の授業を担当している教授の息子さんがそのチームに所属しているというご縁もあり、全員で応援に行くことになりました。

試合前には、ルール説明の時間も設けていただきましたが、思っていた以上に複雑で驚きました。当日は、チアリーディングやマーチングバンドの演奏もあり、街全体でチームを応援するような一体感に包まれていました。

ハーフタイムや得点時には、華やかなパフォーマンスが行われ、まさにアメリカの「スポーツ文化」を肌で感じることができました。



最後に

このように、日々新しい経験と学びの連続ですが、一つひとつの出会いや出来事を大切にしながら、留学生生活を充実させていきたいと思っております。

今後も、自分の成長を福井県の皆様に還元できるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本報告書についてのご質問や問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

作成者：佐々木めい

作成日：2025 年 10 月 06 日

ご挨拶

今年は9月に入ってから気温が上がり続け、例年では既に日中でも冷え込むこの時期に、1日の平均気温が25度ほどで毎日快適な日々を過ごしています。

毎日が瞬きの間に過ぎていきますが、目標を持ち、時間は有限であることを忘れずに過ごしていきたいと思います。

さて、9月の間にあったイベントに加えて、特に印象に残っている授業についても紹介したいと思います。また、アメリカでの生活も2ヶ月ほどが過ぎたところで、日本から準備して持ってきて良かったものや、逆にあまり必要を感じなかったものもまとめてみました。

○English for Specific Purposes

この授業は、世界各国の童話や物語、論文を読み、TEDや海外のニュース、さらには海外企業のマーケティング戦略紹介動画などを見て批判的思考を養う内容です。英文学専攻の先生が主導しており、幅広い文化的視点から議論が展開されます。

例えば、「世界一幸せな国」と言われるフィンランドは本当に幸せなのか？毎年行われる幸福度調査は「幸せ」の定義が多様であるにもかかわらず、単一の指標で測ろうとするのは問題ではないか？といった議題を通じ、アメリカ文化だけでなくグローバルな視点から批判的思考を実践する場となっています。毎回多くの気づきがあり、思考面で非常に刺激的な授業です。

○アートフェスティバル

9月初旬に開催されたこのイベントは、フィンドレー1年に1回のみ行われます。

フィンドレー周辺の芸術家たちがそれぞれの作品を持ち寄り、街のメインストリートが歩行者天国として閉鎖され、多彩な出店が並びます。絵画や彫刻、アクセサリなど、様々な形のアート作品が街中にあふれ、訪れた人々を楽しませていました。

フードトラックも多数出店しており、多国籍の料



理が並ぶ中、地元の人々や観光客が思い思いに交流している様子が印象的でした。

○オクトーバーフェスティバル

こちらは毎年九月末に開かれる、ドイツの伝統を1日かけてお祝いするお祭りです。家族連れにも人気のこのフェスティバルは、伝統的なドイツ音楽のライブ演奏やエンターテインメント、様々なコンテスト、シュミッツ・ソーセージ・ハウスなどの出店による本格的なドイツ料理、キンダープラッツ・キッズゾーン、そして40種類以上のクラフトビールとドイツビールが楽しめます。



ビールは飲みませんでしたが、ドイツの食文化を存分に楽しむことができる良い機会になりました。

○日本から持っていくべきもの

渡米して2ヶ月が経過した今だからこそ分かる、準備しておくくと便利なものをまとめました。

【文房具系】

- ・細かい区切りがあるファイルやルーズリーフは必須です。こちらではルーズリーフのように穴がたくさん空いた紙はほとんど売っていません。
- ・シャーペンの芯の替えも手に入りにくく、現在困っています。ファイルも種類が限られているので日本からの持参がおすすめです。

- 細かい仕切りがあるファイル
- ルーズリーフ
- シャーペンの替え芯
- ファイル

【常備薬】

- ・のどの痛み用の薬（例：ベンザブロック）
- ・胃薬
- ・コンタクト使用者は目薬も忘れずに

基本的に他の薬は現地でも安価に入手可能です。成分や使い方などはチャット GPT などで調べれば安心です。

【衣類】

- ・前開きのパーカー（薄手のものと裏起毛のもの）
- ・ジム用の衣類
- ・ランニングシューズ
- ・重ね着ができる服全般
- ・良質なダウンジャケット 1 着
- ・ユニクロのウルトラライトダウン
- ・スーツ（就活をしなくても、公的機関への訪問時に必要な場合があります）

【スキンケア】

とにかく乾燥がひどいので要注意です。

- ・冬場に使うようなしっとり系スキンケア用品
- ・化粧水（現地では本当に良いものがほとんどないです）
- ・普段ボディクリームを使わない方もボディクリームを持参することをおすすめします

【キッチン系】

- ・サランラップ
- ・粉末状のカレールーやシチュールーなど
- ・肉じゃがや親子丼の素

お米は意外と現地で手に入りますし、鍋で簡単に炊けるため、持参しなくて大丈夫です。ただ、品質に問題があるサランラップなどは日本から持ってくると安心です。

【収納系】

- ・クローゼットにかけられる収納用品
- ・S 字フック

○アメリカに到着してから購入したもの

【リネン系】

- ・ベッドシーツ、枕カバー（2 枚セットで売っていることが多いです）
- ・掛け布団、追加の毛布
- ・バスタオル、フェイスタオル、ハンドタオル（セット購入がお得です）

【洗剤】

- ・食器用洗剤（寮やシェアハウスには食洗機がないことが多いです）
- ・洗濯用洗剤

【その他】

- ・洗濯かご
- ・スキンケア用品などの整理用のカゴ
- ・ハンガー

○事前に知っておくとよかったこと

- ・学費関連が想像以上に複雑です。

→学費は一括で銀行送金するのがおすすめ。手続きの労力が最も少なく、何より日本で手続きを済ませられます。ただし、実際に反映されるまでに2ヶ月かかることもあります。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

作成者：佐々木めい
作成日：2025年11月4日

ご挨拶

11月2日をもってアメリカではサマータイムが終了し、冬時間へと移行しました。これにより、日本との時差は夏季の-13時間から-14時間へと変更されています。気温も1日を通して最高13度ほどになり、本格的な冬の訪れを感じる季節となりました。

皆様はいかがお過ごしでしょうか。寒暖差の大きい時期ですので、どうぞお体にお気をつけください。私自身も、体調管理を意識しながら生活リズムを整えて過ごしています。

近況報告：就職活動と学業について

今月は、日本で進めてきた就職活動を振り返りつつ、アメリカでの就職活動に関する情報収集を行いました。また、来学期（後期）からの履修登録手続きも進めています。

私は現在、日本の大学を休学し、アメリカ・フィンドレー大学に留学しています。本レポートでは、日本とアメリカの就職活動の違いや、学部コースへの編入に向けたプロセスについてご報告します。

ボストンキャリアフォーラムを通じて見えた就職活動の違い

私は実際に参加していませんが、アメリカで行われる「ボストンキャリアフォーラム（Boston Career Forum）」について調べる中で、日米間の就職活動の特徴や価値観の違いを強く感じました。

ボストンキャリアフォーラムは、日英バイリンガルの学生を対象に毎年開催される世界最大級の就職イベントです。参加企業は主に日系企業ですが、日本での選考とは異なり、学業成績（GPA）や専攻内容などの学問的成果をより重視する傾向があります。

また、論理的思考力や課題解決力、合理的に行動できるかといった点が評価の対象となりやすいことも特徴です。こうした違いを知ることで、改めて自分の強みや今後磨くべき能力を見つめ直すきっかけになりました。

さらに、現地での就活は、スケジュール管理や事前準備の徹底が特に重要だと感じました。多くの企業はキャリアフォーラムで最終面接を実施するため、事前にオンラインで選考を進めておく必要があるなど、計画性と行動力が問われる形式であることがわかりました。

履修登録について

前期は英語集中コース（IELP）に所属していましたが、後期からは学部コースへと進学します。

英語集中コースにはレベル 1～3 があり、レベル 3 を修了する、または Placement Test（クラス分けテスト）でレベル 3 相当のスコアを取ると、学部コースへの編入が可能になります。

Placement Test はパソコン上で実施され、解答結果によって難易度が変化する形式です。リスニング・リーディング・文法など総合的な英語力を測定します。

学部では、日本で専攻していた内容と関連する経営学部マーケティング専攻を履修予定です。授業の構成は日本と似ており、前期に基礎科目、後期に発展科目が配置されています。ただし、発展科目を受講するには「前期に特定の科目を修了していること」が条件になる場合があります。

その場合でも、教授に直接メールを送り、履修の許可を交渉することで受講を認めてもらえるケースが多いです。許可が得られた後は、専用の履修登録システムを通じてアドバイザーの承認を受け、正式に登録します。

日本と大きく異なる点は少ないものの、教授とのやり取りや手続きの準備に時間がかかるため、計画的に進めることが大切だと感じました。

課外編

こちらでは、私の大好きなスタジオジブリの作品が映画館で上映されるとのことで、「千と千尋の神隠し」を友人たちと鑑賞しに行きました。日本の文化的要素が多く含まれた作品であるため、上映後には友人たちと神道の概念や登場人物の行動背景などについて話し合い、自国の文化を英語で説明・共有する良い機会となりました。自分にとって当たり前だった価値観を言語化して伝える難しさと同時に、文化的な違いを越えて共感が生まれる瞬間の面白さも感じました。

また、私がもう一人の「推し」であるアメリカのポップ歌手、**テイラー・スウィフト**が新アルバムを発表し、そのミュージックビデオを映画館で公開するパーティ形式の上映イベントが開催されました。テイラー・スウィフトが好きな友人たちと一緒に参加し、テーマカラーに合わせて洋服をコーディネートして楽しみました。上映中は観客全体が一体となって盛り上がり、映画館で声を出して楽しむことがマナー違反ではない文化を実際に体験できたのがとても新鮮でした。

これらの経験を通して、異文化の中で自分の「好き」を通じて他者とつながることの楽しさや、文化を越えた交流の豊かさを改めて実感しました。



まとめ

今月は、就職活動に関する情報収集と、学部編入に向けた準備を並行して行いました。実際に行動する前に海外での就職事情を調べることで、将来どのような環境で働きたいか、自分に合ったキャリアの方向性をより具体的に考えるきっかけになりました。今後も、留学中でしか得られない経験を積み重ねながら、柔軟な視野をもって成長していきたいと思います。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

作成者：佐々木めい

作成日：2025年12月2日

ご挨拶

こちらでは初雪が舞い、本格的な冬の寒さが訪れる季節となりました。最近は最高気温がマイナス1℃前後の日もあり、すでに福井の真冬のような気候です。日本から持参したウルトラライトダウンが早くも欠かせない存在になっています。

日本ではちょうど感染症が流行し始める時期かと思いますが、皆さまが変わらずお元気に過ごされていることを願っております。

感謝祭 (Thanksgiving) について

今月は、アメリカ文化の代表的な祝日である感謝祭 (Thanksgiving) に合わせて、約一週間の休暇がありました。感謝祭は約400年前、イギリスから移住したキリスト教徒 (ピルグリム) がネイティブアメリカンと収穫を祝い、感謝を捧げたことに由来しています。

現在では、一年の恵みや家族の健康に感謝しながら、家族や親しい人々が集まって食事を囲む、アメリカでも最も大切にされている祝日の一つです。

私はこの休暇中、ルームメイトの実家があるペンシルベニア州ピッツバーグに滞在しました。大学の寮とはまた違った「アメリカ家庭の日常」に触れることができ、文化理解の面でも非常に貴重な経験となりました。

感謝祭ディナーと食文化体験

感謝祭といえば、やはり欠かせないのが伝統的なディナーです。

メイン料理

- 七面鳥のロースト
- クランベリーソース
- Stuffing (七面鳥に角切りパンを詰めて焼いた伝統料理)

七面鳥のジューシーさとクランベリーソースの甘酸っぱさの組み合わせは、和食にはない独特の味わいでとても新鮮でした。

副菜

- マッシュポテト
- グレービーソース
- グリーンビーンキャセロール
- ヤム芋の甘露煮
- コーンブレッド

それぞれの料理が味や食感のバランスを生み出し、家族で長い時間をかけて調理し食卓を

囲むというアメリカらしい文化が強く感じられました。

中でも印象に残ったのは パースニップ（白いにんじん）です。日本ではあまり馴染みがなく、ハーブのような香りとほくほくした食感が特徴でした。ルームメイトの家庭ではこれを他の根菜と一緒にグリルして食べるのが伝統とのことで、新鮮な体験となりました。また、クランベリーソースと七面鳥の組み合わせも私にとって初めての組み合わせでしたがおいしかったです。



食後の習慣「Wish Bone」

七面鳥の鎖骨を 2 人で引っ張り合い、大きい方を取った人の願いごとが叶うとされる遊びです。今回は私が大きな部分を取ることができ、小さな幸運をもらえたようで嬉しい気持ちになりました。



ブロードウェイ『レ・ミゼラブル』鑑賞

休暇の 3 日目には、念願だったブロードウェイミュージカル『レ・ミゼラブル』を鑑賞しました。

劇中で使われる英語は歴史的背景を含む表現が多く、すべてを正確に理解することは難しかったものの、物語の基礎知識があったことで感情の流れや場面の意図を追うことはできました。

さらに今回の鑑賞は、語学学習という面でも大きな意義を感じました。すべての単語が聞き取れなくても、登場人物の感情・舞台の雰囲気から内容が補完されていく経験は、語学力が総合的に働いている感覚を実感させてくれましたし、フランス革命期の価値観や社会背景を舞台を通して感じることで、言語だけではなく歴史・文化理解も広がり、留学中ならではの大きな学びとなりました。異文化芸術が文化理解の窓口になる経験だったと思います。また、高校時代に覚えた劇中歌を、本場の劇場で実際に聴くことができた瞬間は胸が熱くなり、学びが時間を超えて自分自身の成長につながっていることを実感しました。

総じて、今回の鑑賞は語学面・文化面の双方で大きな刺激と学びがあり、留學生活の中でも特に印象的な出来事となりました。



オーロラ観察

11月12日、太陽フレアによる磁気嵐の影響で、通常であれば観察が難しい地域においてオーロラを目にすることができました。今回特に興味深かったのは、日本国内の報道と、こちらの現地メディアによる報道の視点の違いです。

日本のニュースでは、太陽フレアによる電力網や通信網への影響可能性が強調され、主要データのバックアップなど「備え」を促す内容が中心でした。一方、こちらの報道ではインフラ面への影響にも触れつつ、主な焦点は“太陽活動の活発化によって低緯度でもオーロラが観察できるチャンスが高まった”という点に置かれていました。科学的な現象を市民の興味につながる形で伝える報道姿勢が印象的でした。

実際、比較的低緯度に位置するこの地域でもオーロラ観測の可能性が高まったことから、私たちが星がよく見える場所へ観察に向かいました。前日が特に発光が強く、友人たちのSNSには空一面を覆う鮮やかな赤色のオーロラが多数投稿されていました。私たちが訪れた日はそこまで強い活動は見られなかったものの、夜空に淡い緑色の光が揺れる様子を実際に確認できました。

オーロラを見ることは私にとって人生の大きな目標の一つであり、今回その一部を達成できたことに深く感動しました。振り返ると、こうした体験は偶然の積み重ねと、ご縁によって訪れるものだと強く実感します。巡ってきたチャンスには極力ためらわずに挑戦することの大切さを、改めて学んだ出来事でした。



おわりに

11 月は文化的・学術的な体験が非常に多く、日常の学習を超えて視野が大きく広がった月となりました。偶然やご縁から得られた機会が多く、「巡ってきたチャンスに積極的に向き合うことの大切さ」を改めて感じました。

これらの経験を今後の学習や生活にも活かしていきたいと思います。

引用：

在日売国大使館と領事館/感謝祭 11 月第 4 木曜日 (2025/12/07)

<https://jp.usembassy.gov/ja/acj-holidays-thanksgiving/>

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

作成者：佐々木めい

作成日：2026年1月07日

ご挨拶

皆様、明けましておめでとうございます。

2025年は、私自身にとって環境面・心理面の双方において大きな転機となる一年でした。留学を決意したことに加え、日本で進めていた就職活動を継続しながら、現地においても新たなコミュニティへ積極的に参加するなど、変化と挑戦の連続の年となりました。異なる文化や価値観の中で生活し、新しい人間関係を築く経験を重ねる中で、これまで支えてくださった家族や周囲の方々の存在の大きさを改めて実感しています。同時に、自身が多くの方々の支えの上に、現在の学びの機会を得ていることを強く意識するようになりました。

フロリダで過ごすクリスマスシーズン

12月は期末試験終了後から1月7日まで冬休みとなり、約一か月間のクリスマス休暇がありました。本報告では、この休暇期間中に経験した出来事についてご報告いたします。

私は約2年前にフロリダ州でホームステイをしていたご縁から、今年もクリスマスシーズンに再び招いていただき、約10日間を現地で過ごしました。滞在中は、オハイオ州では冬季に行うことが難しいゴルフを楽しんだほか、現地の友人と共にディズニーワールドを訪れるなど、充実した時間を過ごしました。ディズニーワールドでは、4つのパークを1日で巡ることができ、約23kmを歩く大変な一日ではありましたが、日本では体験できないアトラクションやキャラクターに触れることができ、非常に印象深い経験となりました。スター・ウォーズ関連のライドやアニマルキングダムサファリの冬季限定のパレードなど、広大な敷地を持つディズニーワールドならではの魅力を存分に体感しました。また、訪問日は私の誕生日でもあり、誕生日バッジを着けていたことで、多くの来園者やキャストの方々から祝福の言葉をいただきました。中にはスターバックスでドリンクを提供していただく場面もあり、ディズニーワールドの高いホスピタリティを強く感じる一日となりました。

クリスマス当日は、教会での礼拝に参加した後、ホストファミリーの親族が集まり、プレゼント交換を行いました。宗教的・文化的背景を実体験として学ぶ貴重な機会となりました。



フィンドレーで迎えた誕生日

誕生日の前日には、フィンドレーからフロリダへ移動するタイミングと、日本へ帰国する他の日本人留学生の出発日が重なったことから、合同で送別会兼誕生日祝いのパーティを開催しました。スイーツ作りが得意な友人が、私たちのために複数のケーキを用意してくれたり、別の友人が皆からのメッセージをまとめた動画を制作してくれたりと、多くの心遣いに支えられた時間でした。

幼い頃から「22歳の誕生日をアメリカで迎えること」が夢であったため、その夢を叶える手助けをしてくれた友人たちには、感謝の気持ちでいっぱいです。休暇中で多くの現地学生が帰省する中、日本人学生や近隣に住む現地の友人たちが集まってくれたこともあり、温かい人のつながりを改めて実感しました。

年末には、上記のメンバーと共に忘年会を行い、留学生活を振り返る機会を持ちました。8月からフィンドレーでの留学生活が始まって以来、特に強く感じているのは、与えられた機会に対して前向きに取り組む姿勢の重要性です。慣れない環境や言語の壁により、思うように意思疎通ができず、悔しさや戸惑いを感じる場面も多くありました。しかし、それら一つ

一つの経験が、自身の向上心を刺激し、人間関係の構築や適応力の向上につながっていると感じています。

近年、「コンフォートゾーンから抜け出し、自身の成長に投資すること」の重要性が広く語られていますが、それを継続的に実践することの難しさは、場所や状況を問わず共通するものであると実感しました。一方で、困難や後悔を伴う経験こそが、将来を形作る重要な糧となり、人生をより豊かにする契機になり得ると考えるようになりました。

本年も、挑戦や変化を恐れることなく、一つ一つの学びの機会を大切にしながら、学業および自己成長の双方に誠実に取り組んでまいります。



以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

2025-2026 フィンドレー大学・福井奨学生月例報告書 1月

作成者：佐々木めい
作成日：2026年2月8日

ご挨拶

現在、全米各地において歴史的な寒波が襲来しており、冬の寒さが例年にも増して厳しさを増しています。年間を通して比較的温暖であるフロリダ州においても気温が0度前後まで低下し、ニューヨーク州では氷点下45度を記録するなど、24州において非常事態宣言が発令される事態となりました。同時期に日本国内においても、福井県をはじめとする地域で大雪警報が発令されるなど、日米双方で厳しい冬の寒波が到来しております。皆様におかれましては、くれぐれもご自愛のうえお過ごしください。

冬休みに入ると、現地の学生はそれぞれの地元へ帰省するため、フィンドレー大学のキャンパス内に残るのは主に留学生のみとなります。冬休みは例年、12月中旬から1月上旬までの約1か月間であり、年明けの瞬間は、日本人留学生や現地に残っていた学生とともに新年を祝いました。当日は各自が料理を持ち寄り、留学生活について語り合いながらカードゲームを楽しむなど、和やかな雰囲気の中で新年を迎えました。

海外で年越しを迎えるのは初めての経験でしたが、日本で感じられるような、新年特有の空気が澄み渡るような感覚はあまりなく、この独特の雰囲気は日本ならではのもののなのだと改めて実感しました。

お湯花火と寒さによる休校

また、別の日には「お湯花火」と呼ばれる自然現象を目にする機会がありました。これは、屋外で沸騰したお湯を空中に投げると、熱湯が瞬時に微細な霧状となり、氷晶へと変化することで、花火のように見える現象です。細かい水滴が周囲の極めて冷たい空気によって急激に冷却され、空中で凍結することで発生します。通常は気温がマイナス20度から30度程度で見られると言われていますが、その日は気温が約マイナス15度でありながら、この現象を確認することができました。

2学期開始後は気温が継続的に低下し、日中の最高気温がマイナス10度前後にとどまる日もありました。さらに積雪も重なったことで、人生で初めて寒波を理由とした休校を経験しました。休校になっていることに気づかず登校しようとし、わずか10分ほど屋外を歩いただけで、露出していた皮膚に強い痛みを感じ、次第に感覚が失われていきました。同行していた友人の中には、空気に触れていた部分に水ぶくれができた者もあり、寒波は一定の度合いを超えると生命の危険に直結するものであると強く認識しました。

アメリカでは寒波に関する警戒レベルが三段階に分けられており、第二段階では幼稚園から高校までが休校となりますが、大学が休校となるケースは非常に稀です。第三段階に達すると、緊急時以外の車両運転が禁止され、違反した場合は逮捕される可能性もあります。日本の天候に関する警報・注意報と似た制度ではありますが、行動を法的に制限するほどの強制力を持つ点は、私にとって大きな驚きの一つでした。休校中は、みんなでマフィンを作って室内での活動を楽しみました。



友人のテニスの試合観戦

私の友人が大学のテニス部に所属していることから、その公式試合を観戦する機会がありました。アメリカの大学スポーツは、大学の規模や競技レベルに応じて Division1 から Division3 までの三つの区分に分けられており、私が在籍しているフィンドレー大学は Division2 に分類されています。

Division1 に属する大学は、非常に高い競技水準を誇り、激しい競争環境、巨額の予算、最先端のスポーツ施設を備えている点が特徴です。また、選手には多額の奨学金が支給される場合も多く、その分、厳しいトレーニングと高い競技成績、そして学業との両立が強く求められます。Division2 および Division3 へと下がるにつれて、競技規模や注目度は比較的落ち着いたものになりますが、その分、学生としての生活と競技活動を両立しやすい環境が整えられていると感じました。

当日対戦した相手校は Division3 に所属する大学であったことも影響してか、試合は終始フィンドレー大学が主導権を握り、最終的に勝利を収めました。私はこれまでテニスの試合を生で観戦した経験がなく、競技の進行や試合時間についても詳しく理解していませんでしたが、シングルス の 1 試合が平均して約 2 時間にも及ぶことを知り、大きな驚きを覚えました。

試合中、選手たちは長時間にわたり集中力を切らすことなく、激しいラリーや瞬時の判断を繰り返しており、技術力だけでなく、体力や精神力の重要性を強く感じました。特に、ポイントごとに戦術を切り替えながら試合を組み立てていく姿は非常に印象的で、テニス単なる体力勝負ではなく、高度な戦略性を伴う競技であることを実感しました。

今回の観戦を通じて、アメリカの大学スポーツが学生生活の中で大きな役割を果たしていること、そして競技を通して培われる忍耐力や自己管理能力が、学業や将来の社会生活にも活かされているのを感じました。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

作成者：佐々木めい
作成日：2026年3月9日

ご挨拶

こちらは段々と春の陽気が感じられるようになり、日によっては平均気温が5度ほどになる日も増えてきました。少し前までは手放せなかったダウンジャケットの出番も減り、0度を超えるだけで「今日は暖かいな」と感じる自分の感覚に、北国の冬を越した実感が湧いています。

日本でも「春一番」の頼りが届いたようですが、こちらも3月8日からサマータイムが始まり、日本とも時差が13時間に縮まりました。刻一刻と近づく留学生活の節目を意識しながら、一日一日をおろそかにせず、確かな目標を胸に最後まで駆け抜けたと思います。

友人の誕生日パーティー

同じく日本から留学に来ている友人が20歳の誕生日を迎えたので、そのお祝いをみんなで行いました。場所はJapanese houseという日本人達がイベント事を行う際に自由に借りることができるハウスが1つあるので、そちらで行いました。節分の日に行いみんなで恵方巻を作って今年の方角を向きながら食べ、アメリカにいなながらも日本の文化を感じながらこの日は過ごすことができ、懐かしいような気分になりながら恵方巻を食べました。友人は歌手のテイラー・スウィフトさんの大ファンなので、プレゼントとしてそのグッズをあげたり、マフィンに20個ほど焼いていってみんなで食べました。

私事ですが、先月からマフィン作りに熱中しており、コロナ禍以来のお菓子作りブームが再来しています。キッチンにはある程度お菓子作りができる様に初期に学校から借りているキッチングッズがあるので、そちらを活用しています。生活用品以上のものも貸し出して頂けるので、ぜひ皆さんもハウスに入居する際にはBuffet Centreという場所に行く事をおすすめします。



スケート体験

もう一人の県の奨学生の伊藤さんや現地で仲良くなった子達と一緒にスケートをしに行きました。福井県の敦賀市にも同じスケート体験施設がありますが、これまでに私は数回しかチャレンジしたことがなかったので上手に滑ることができる子に2時間ほど教えてもらい、ようやく手を放してゆっくり滑ることができる様になりました。友人から聞いた話ですが、フィンドレーでは比較的の幼いころからスケートに触れる機会が豊富だそうです。平地で山がないので福井のようにスキーができる機会がない分、皆さんスケートをすると思いました。そのためか、皆さん小さな子でも上手に滑ることができていてカッコいいなと思いました。



ルームメイト家族とのミニトリップ

ルームメイトはペンシルベニア州のピッツバーグ出身なのですが、週末にかけてルームメイトのご家族がフィンドレーまで訪れに来る予定とのことで、一緒にお出かけに行きました。一週間後にルームメイトと一緒に入っている合唱団のヨーロッパツアーがあるので、そのための買い出しに行くついでにショッピングモールに立ち寄りしました。日本でいう滋賀県の竜王アウトレットモールのようなものに近くて、そこでみんなで様々な思い出話をしながらランチを食べ、コーヒー片手にショッピングを楽しみました。その後は世界三大悲劇のひとつともされている「嵐が丘」(Wuthering Heights)の実写版映画を見に行きました。この原作となった作品はサマセット・モームが選んだ世界の十大小説にも選ばれており、ノミネートされている作品のうち唯一のアメリカ文学になります。知識だけでしってはいたものの原作を読んだことがなかったので、今回映画を見て改めて原作を英語で読んでみたいと思う気持ちが増しました。映画が終わった後は小腹が空いたので、ワッフルハウスに行きました。こちらにも私には初体験で、夜行くと治安が悪いと噂のワッフルハウスに深夜に行ったわけですが、幸いなことに、厨房にネズミがいたこと以外は特に変わった様子はありませんでした。

こうして1日のミニトリップを終えて感じた事は、やはり与えられた機会に対して拒否する事は、大きな機会損失に繋がる可能性があるという事です。日本に比べて、単なるお出かけが意図せず学術的な問いに繋がったりすることが圧倒的に多いと感じています。自分を取り囲む環境に、所謂自分にとって「普通」のものが無い状態がどれだけ自分にとって刺激になっているのか、改めて実感することができた良い機会となりました。



ここまでの留学を通じて、心境の変化

これはこれまでのレポートには書いてこなかった章で、読者の皆様には唐突で大変恐縮ですが、改めてこの留学を通じての自分の内面の変化や学びなどを書き記そうと思います。

私は自分を「スタミナのない社交家」と考えていますが、これは一見矛盾する様に聞こえるかも知れません。しかし、未知の環境において「機会損失を恐れる野心」と「自己のキャパシティ」との間で揺れ動くことは、私にとって最大の懸念事項でした。周囲と同等に経験を積み、人間関係を構築しなければならないという、誰に強制されるでもない無言の圧力は、日本で成人し精神的な安定を得てからは久しく忘れていた焦燥感に近いものでした。当初、こうした強迫観念に似た自意識に嫌悪感を抱きながら過ごしていましたが、いま振り返れば、その感情の正体は「居場所の密度の差」に起因していたのだと考えています。

日本での生活においては、大学や職場、家族、部活動、そして気心の知れた友人達と言った具合に、自己を規定する居場所が多層的に分散されていました。しかし、留学先ではその全てが学校という単一のコミュニティに集約されます。逃げ場のない環境で、ここで失敗すれば後がないという極度の緊張に晒される事は避けられないプロセスだったのかもしれない。

渡航から7ヶ月が経過した現在、飾らない自分を提示することで無理のない人間関係を築く自己開示の質を上げること、そして「何もしない」という停滞の状態をいかに能動的にコントロールし、自分のペースを維持するかという二点の重要性に気がついてからようやく自分のペースがつかめてきた様な気がしています。こうした内面の揺らぎを肯定し、環境に適応させる術を学んだことは、学業上の成果以上に、今後の人生における大きな収穫であったと確信しています。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

2025-2026 フィンドレー大学・福井奨学生月例報告書 3月

作成者：佐々木めい

作成日：2026 年 4 月 9 日

ご挨拶

欧州遠征から戻り、フィンドレー特有の変わりやすい空模様に、春の訪れを感じる季節となりました。皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。今回のツアーでの学びについて、以下の通りご報告いたします。

ヨーロッパ遠征合唱ツアー

遠征の概要および背景

私は前期より合唱部に所属しており、本団体の恒例行事である「欧州 2 カ国における無料コンサート・ツアー」に同行しました。本遠征は、春季休暇中の 1 週間を利用して催行されたもので、ドイツ連邦共和国にて 2 回、チェコ共和国にて 1 回、計 3 回の合唱コンサートを主宰しました。参加にあたっての選考等は特段設けられておりませんが、前期からの継続的な部活動への貢献が参加の実質的な条件となっています。費用面については、学校側より多大な補助をいただいたため、個人の負担額は航空運賃（フライト代）のみに抑えられ、非常に恵まれた環境下での学術・文化交流となりました。

ドイツ：歴史の追体験と演奏活動

米国デトロイト空港を出発し、約 7 時間の空路を経てドイツのフランクフルトへと向かいました。米国時間の夕刻に出発し、現地時間の早朝に到着するという行程であったため、到着後は休息を取ることなく、班員一同で徹夜の状態でフランクフルト市街の視察を開始しました。

歴史的遺産との遭遇と考察

市内のカフェにて班員と休息を取った後、近隣に位置するフランクフルト大聖堂を視察しました。同施設は、1356 年の「金印勅令」に基づき神聖ローマ帝国皇帝を選出する重要な場所であり、実際に 10 代もの皇帝の戴冠式が執り行われた歴史的枢要を担っています。高校時代の世界史履修時に習得した知識が、眼前の実体的な遺産と初めて結びつく感覚は、単なる知識の確認を超えた、知的な感動を伴う経験となりました。また、特筆すべき点として、市街地には意識的に探求せずとも至る所に貴重な歴史的財産が点在しており、適切な事前調査なしにはその重要性を見失いかねないほどの文化的な密度の濃さを実感しました。訪問した全ての建造物が何らかの歴史的背景を有しているという感覚は、私にとって非常に新鮮な驚きでした。

ヴュルツブルク（Würzburg）での公演と世界遺産レジデンツ

フランクフルトでの視察後、最初のコンサート会場であるヴュルツブルクへと移動しました。公演では、ドイツ語、フランス語、韓国語、英語という多言語のプログラムを歌唱し、音楽を通じた国際交流を実践しました。夕食には、ホテル近隣にてザワークラウト、黒ビール、ソーセージといった伝統的なドイツ料理を堪能し、現地の食文化を五感で理解する機会を得ました。翌日には、世界遺産に指定されている「レジデンツ」を訪問しました。ナポレオンが「欧州で最も美しい館」と称え、ハプスブルク家のマリア・テレジアが「宮殿中の宮殿」と評した通り、その建築は豪華絢爛の一語に尽きるものでした。設計者バルタザール・ノイマンの傑作であり、支柱を一切排除した空間に描かれた世界最大級のフレスコ画は、第二次世界大戦時の英国軍による激しい爆撃を耐え抜き、今なお当時の姿を留めています。館内には、当時の壮麗な居室のみならず、戦争により破壊された歴史や当時の惨状を伝える写真・資料も展示されていました。規定により内部撮影は禁じられていましたが、かつての皇帝やマリア・テレジアが滞在した空間を実際に歩むことで、歴史が動いていた息遣いを肌で感じるとともに、戦争が人命のみならず「文明そのもの」を消滅させうる極めて恐ろしいものであるという事実を、深く痛感しました。



チェコ共和国：地政学的理解と平和への思索

続いて、バスにてチェコ共和国のプルゼニ（Plzeň）へと移動しました。移動中の車内では、本学（フィンドレー大学）に在籍経験を持つチェコ人通訳者より、両国の近現代史および地政学的な関係性について詳細な講義を受けました。

戦争の負の遺産と沈黙の平原

1938年のミュンヘン協定により、ドイツ系住民が多数居住するズデーテン地方がナチス・ドイツに併合された歴史、そしてそれがチェコスロバキアの解体と第二次世界大戦の火種となった背景を学びました。その後、実際に大戦中に村一帯が焼き払われた現場を訪れましたが、そこには今なお再開発の手が及んでおらず、かつて村が存在した場所にはただ静謐な平原が広がっていました。その光景が放つ「静けさ」は、うまく言語化できないほどの重みをもって私の目に焼き付いており、戦争の凄惨さを象徴する場所として深く記憶に刻まれ

ました。

プラハにおける文化交流と伝統文化の享受

最終目的地であるプラハでは、フラデツ・クラークロヴェ (Hradec Králové) での公演を経て、丸一日の自由視察の機会を得ました。今回のツアーにおいて最も強く印象に残ったのは、このプラハでの滞在でした。チェコには日本と比較しても極めて強固な飲酒文化が根差しており、飲食店でのウェルカムドリンクとしてショットが提供されることや、全てのカフェにアルコールメニューが完備されている等、社会全体にお酒が受容されている文化形成を目の当たりにしました。特にビールの品質は際立っており、レストランが自前の醸造所を保有していることも珍しくなく、その種類の豊富さと質の高さに感銘を受けました。プラハにおいては、かつて米国フィンドレーで親交を深めたチェコ人の友人と再会を果たし、現地の案内を受けることができました。友人の推奨により、観光客には知られていない隠れミシュランの名店を訪れ、伝統的な鴨肉のローストや「クネドリーキ」と呼ばれる蒸しパン状の付け合わせ、さらには牛肉のタルタル（ユッケ状の料理）を囲みながら、深い対話の時間を持ちました。日本では接することのない未知の食体験は、どれも素晴らしく、感動に値するものでした。



プラハ城視察における芸術的・歴史的所見

プラハ滞在の集大成として、街の象徴であるプラハ城を公式に視察しました。世界最大級のこの城郭は、単なる王宮としての役割を超え、チェコの国家としてのアイデンティティと波乱に満ちた歴史を象徴する巨大な文化財の集合体でした。

城内にそびえ立つ聖ヴィート大聖堂においては、その圧倒的なスケールとゴシック建築の精緻さに息を呑む思いがしました。特に、チェコが誇る芸術家アルフォンス・ミュシャの手によるステンドグラスから差し込む光は、神聖さと芸術性が高次元で融合しており、時を忘れて見入ってしまうほどの美しさでした。数世紀にわたり増改築を繰り返してきた城郭の重層的な構造は、ボヘミア王国の繁栄からハプスブルク家の統治、そして現代の共和国に至るまでの長い歴史の集積を如実に物語っているようでした。

また、城のテラスから俯瞰したプラハ市街の景観は、「百塔の街」と称されるに相応しいオ

レンジ色の屋根が続く統一美を保持しており、都市計画と歴史保存が高度に両立されていることがわかり、感動しました。合唱という無形の芸術表現に携わる者として、このような悠久の時間を刻む有形の文化遺産に触れることは、自身の表現者としての感性を磨き、多角的な視野を養う上で極めて有意義な経験となりました。



勝利の聖母教会と「乳児イエス」像

また、マラー・ストラナ地区にある「勝利の聖母教会」へも足を運びました。ここには、世界中から巡礼者が集まる「プラハの乳児イエス (Infant Jesus of Prague)」像が安置されています。高さ 50 センチメートルに満たない小さな聖像ですが、世界各国から贈られた豪華な衣装に身を包んでおり、その慈愛に満ちた姿には不思議な力強さを感じました。多くの人々が静かに祈りを捧げる教会の空気感に触れ、チェコの人々の精神的な支柱となっている信仰の深さを実感しました。合唱という音楽活動を通じて「祈り」の心を表現することもある私たちにとって、この場所での体験は非常に意義深いものとなりました。



プラハ公演

本遠征の中でも特に強く心に刻まれているのが、プラハでのコンサートです。この地で肌で感じた「音楽の都」としての真髄は、私の芸術観を大きく揺さぶるものでした。

驚かされたのは、観客層の厚さとその質の高さです。特別なホールではなく、日常的な商業施設での開催であり、かつ休日でもない平日であったにもかかわらず、会場を埋め尽くすほどの聴衆が集まってくださいました。特筆すべきは、若い世代や小さなお子様連れのご家族までが足を止め、熱心に耳を傾けてくださったことです。音楽や芸術を「特別なもの」としてではなく、生活の一部として大切に育む土壤が、チェコの人々の中に文化として深く息づいていることに、言葉にできないほどの感動を覚えました。

プラハ公演では、現地の合唱団や学校の合唱部の方々と合同で演奏する機会をいただきました。総勢 150 名にも及ぶ大規模な編成となったこのステージは、まさに「overwhelming（圧倒的）」という表現が相応しいものでした。会場に響き渡る声量の凄まじさはもちろん、時には観客の数をも上回るほどの歌手が一体となって声を重ねるという、日本ではなかなか経験し得ない特別な空間となりました。現地の合唱団の方々と声を合わせる中で、言語の壁を越えて一つの音楽を創り上げる高揚感を感じるとともに、その圧倒的な音圧と熱量に包まれながら歌う喜びは、生涯忘れられない経験となりました。



まとめ

今回の遠征を通じて、私は「縁」を大切にすることの重要性を再確認しました。フィンドレーで出会った友人と遠く離れたチェコの地で再会し、現地の文化をより深く知ることができたのは、まさにかけがえのない縁の賜物です。また、合唱部の仲間と共に多言語の壁を越えて歌声を届けた経験や、現地で出会った方々との交流は、音楽が持つ繋がり力を強く実感させてくれました。

何より、学生という多感な時期に、自らの足で歩き、自らの目で歴史の光と影を見つめる経験ができたことに深く感謝しています。本を読んだり話を聞いたりするだけでは得られない、五感をフルに使って広げた視野は、私のこれからの人生において確固たる土台になると確信しています。このような素晴らしい機会を与えてくださった学校側、そしてツアーを

支えてくださった全ての方々に感謝し、この経験を糧にさらなる学業と部活動の発展に努めていきたいと思います。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

作成者：佐々木めい
作成日：2026年5月6日

ご挨拶

留学生活もいよいよ大詰めを迎え、毎月提出してきたこのレポートを執筆するのも、ついに今回が最後となりました。出発前、福井を離れる際に感じていた「一年間」という月日は、果てしなく長い道のりのように思えたものです。しかし、いざ異国の地に身を投じてみれば、毎日は新しい発見と挑戦の連続であり、時間は驚くほどの速度で過ぎ去っていきました。特に帰国を目前に控えたこの数ヶ月間の時の流れの速さは、これまでの人生の中でも類を見ないほどでした。慣れない英語での講義、グループワークでの文化的な衝突、そしてそれを乗り越えて得た仲間との絆。これら一つひとつの経験が積み重なり、現在の自分を形作ってくれたと実感しています。最後となる本レポートでは、留学の締めくくりとなった活動についてご報告いたします。

イースター休暇：キリスト教文化の体験と家庭の温もり

私の通う大学はキリスト教の伝統を重んじる教育機関であるため、四月には「イースター（復活祭）」に伴う一週間弱の休暇がありました。キリスト教圏において、イースターはキリストの復活を祝う非常に重要な行事です。この時期、街中やキャンパス内は卵やウサギのモチーフで彩られ、春の訪れを祝う独特の活気に包まれます。

この休暇中、ペンシルベニア州ピッツバーグにあるルームメイトの自宅に招かれました。アメリカの一般的な家庭で伝統的なイースターを体験できたことは、文化を内側から理解する上で非常に貴重な機会となりました。

特に印象に残っているのは、家族全員で行った「卵染め」と「エッグ・ハント」です。色鮮やかに染めた卵を家中に隠して探し出す遊びは、現地の子供たちにとっては欠かせない行事です。また、伝統的なイースター・ブレッドと一緒に焼く時間は、キッチンに漂う香ばしい匂いとともに、アメリカの家庭の日常を肌で感じるひとときとなりました。

滞在中、以前もお会いした親戚の方々にも再会することができました。別れ際に「いつでも帰っておいで」と温かい言葉をかけていただいたときは、胸が熱くなりました。国籍や文化が違って、これほどまでに深い信頼関係を築けたことは、私の留学生活における大きな収穫です。



Fukuvi USA 会社見学：福井企業のグローバル展開とマネジメント

今回の留学中、自身の専門分野であるマネジメントと郷土・福井がリンクする機会として、「Fukuvi USA（フクビ・USA）」を訪問しました。福井県に本社を置くフクビ化学工業は、建築資材の分野で高い技術力を誇ります。その現地法人を実際に目にすることは、将来マーケティングや管理職を目指す私にとって、大変意義深い学びの場となりました。

工場の歴史について説明を受けた後、実際に製造現場を見学させていただきました。「押出プラスチック」が製品へと形を変えていく工程を一から目視できたのは、今までにない貴重な体験でした。マネジメントの観点で特に感銘を受けたのは、「自社ブランド製品」と「OEM製品」で管理方法を明確に使い分けている点です。品質基準や納期管理など、それぞれの特性に合わせて最適なシステムを運用している点は、日本のものづくりの緻密さを象徴していると感じました。また、工場内が非常に清潔で管理が行き届いている様子からも、生産管理の重要性を再認識しました。

さらに、市場動向についても学びがありました。日本の住宅関連市場が縮小傾向にある一方で、アメリカ市場では依然として強い需要があるという事実は、今後の研究対象として非常に興味深いものです。なぜこれほどまでに市場構造が異なるのか、日米の文化や制度の違いを含め、今後さらに深く掘り下げていきたいと考えています。

何より、社員の皆様が私たちのプレゼンテーションに熱心に耳を傾け、温かく迎え入れてくださったことに深く感謝しています。

プレゼンテーション：成長の捉え方と「キャパシティ」の選択

Fukuvi USA でのプレゼンテーションやスピーチ大会では、この一年間の学びの集大成として二つの考えを共有しました。

一つ目は、「成長とは螺旋（らせん）階段のようなものである」という視点です。

留学中、「自分は進歩していないのではないか」と不安になる時期がありました。しかし、真上から見れば同じ地点を回っているように見えても、横から見れば確実に一段ずつ高いところへ登っている。かつてと同じミスをしたとしても、そこからの学びや視座は変わっているはずだという考え方は、自分自身の支えとなりました。

二つ目は、「キャパシティ（容量）と向き合う勇気」についてです。

私はこの留学を決意した際、日本で持っていた内定や研究など、それまで積み上げてきたものを一度手放してアメリカへ来ました。何かを得るためには、現在の自分のキャパシティから何かを捨てるという「取捨選択」が必要になる場面が必ずあります。今回の選択が正しかったと思える結果を出せたことは自信になりましたが、同時に、結果だけでなく「悩み抜いたプロセス」そのものに価値を置ける大人になりたいと強く感じました。

Sanno America Inc. でのスピーチ：言語の先にある「意思」

また、ピッツバーグ近郊の「Sanno America Inc. (株式会社サンノアメリカ)」にてスピーチを行う機会をいただきました。ここでは日米の教育システムの違いを例に挙げ、アメリカの実践重視のスタイルと、日本の基礎重視のスタイルの相違について論じました。

最終的には、「言語はあくまでツールであり、目的ではない」という点を強調しました。英語を流暢に話すこと以上に、その道具を使って何を伝えたいのかという「意志」の重要性を、この一年間の葛藤を通じて学びました。



最後の Choir コンサート

留学生活において、最も参加してよかったと感じているのが Choir（合唱）の授業です。その締めくくりとして、地元のプロオーケストラと共に開催された最終コンサートは、非常に感動的なものとなりました。

プログラムには、春休みのドイツ・チェコ遠征で歌った曲や、留学当初に必死で練習した曲が並びました。イントロが流れるたびに当時の光景が鮮明に蘇り、これまでの歩みを再確認することができました。一つの授業を通じてこれほどまでに深い思い出を共有し、国境を越えた仲間ができたことは、私にとって何物にも代えがたい経験です。この公演で最後となるメンバーと共にソロを歌い上げることができたことは、一生の思い出となりました。



まとめ：今後の展望

この一年間、福井県奨学生としてアメリカで過ごした日々は、私の価値観を大きく変えるものとなりました。異文化の中で自分を相対化し、新たな視点を得られたことは、これからの人生における確固たる基盤になると確信しています。

Fukuvi USA で見学した高度な生産管理、地域の人々との交流、そして仲間と創り上げたコンサート。これらすべての経験から学んだのは、技術やスキルの重要性はもちろんのこと、それらを支える「誠実な管理」と「人との繋がり」の大切さです。

今後は、この留学で得た知見や国際感覚を、大学でのマーケティングやマネジメントの研究に活かすとともに、将来は福井県、そして社会全体に貢献できる人材になれるよう、一層努力を重ねていく所存です。自分の限界と向き合い、悩み抜いたこの一年のプロセスを糧にして、一步ずつ着実に前進していきたいと思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった福井県の関係者の皆様、そして支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

一年間、本当にありがとうございました。

以上の文章につきまして、ご質問やご意見などございましたら下記メールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu

約 10 ヶ月の留学は私にとって、日本にいては得がたい経験を積むことができた日々でした。同時に、幼いころから 10 年も憧れていた留学生活に思いもしないタイミングでチャレンジすることができ、留学を決心するまでも葛藤の連続でしたが、友人や家族、大学の教授陣を含む、様々な人達にどれほど支えられこの約一年を過ごすことができたかを毎日痛感することができた期間でもありました。昨年から今年にかけては、アメリカ政府が世界規模で学生ビザの受け入れ停止を発表する等、政治的なイレギュラーに見舞われることが多く、日本で過ごしていると当たり前だと錯覚してしまうこと(飛行機に乗る・ビザを取得する等)を成すにも多種多様な人達のサポートが必要になった年でした。その過程で、私は国際交流会館の方々を中心とした大学の教授陣の方々、フィンドレー大学現地の国際交流担当の方にも大変お世話になりました。この場で重ねて、心より御礼申し上げます。

大学卒業を目前にして、就職活動と研究活動の最中に全てを一旦辞め休学し、就職活動を現地にて再度チャレンジする必要性がある中での留学というものは、自分を大きく飛躍させてくれる機会となりました。「前例がない」と言われ、手探りで進めていかなければならない状況は今思い返すと俗に言う、SNS で見ることのできるキラキラとした楽しい思い出ばかりではなかったものの、それ以上に自分の一生の学びを数え切れないほど得ることができました。「人生のルール」を一度外れ、自分の心躍る方へリスクを追い選択する事に対して否定的でなかった周囲への感謝と共に、その選択をする事ができた自分に対しても、肯定したいと思えるような実りの多い 10 ヶ月でした。よく、留学を終えた人達が口を揃えて言う「視野が広がる」「世界が広がる」という様な抽象的な概念を今回体感してきた訳なのですが、今回留学へ行って感じた視野や世界の広がりを見極めると、今後生きる上で役に立つ側面と、内面的な成長の 2 つに分けることができました。

今後キャリアで生きてくる側面については、留学を通じて多種多様な人達に囲まれることで育まれた多様性(期待値の幅)が人間関係のストレス軽減に繋がると感じました。私は、所謂「視野が広がる」とは、自分とは異なる事象への心理的障壁が低くなるということだと理解しています。日々勉学でもビジネスシーンでも、イレギュラーが起きたときにどれだけ臨機応変に対応できるかについては、ここでいう「視野」が大切になります。意見や捉え方の引き出しが多ければ多いほど、対応力に直結すると考えていますが、留学前の準備期間や、留学中ではこの心理的に不快な状況に多く晒されることで私の中で臨機応変に対応する力が身につきました。内面的な成長として、私は特に「自己効力感(自身の能力や行動に対する自信)」を強固に培うことができた実感しています。ありのままの自分を受け入れる「自己肯定感」であれば、国内の生活環境や家庭内でも十分に育むことが可能です。しかし、未知の環境に身を置き、自ら行動を起こして課題を解決していくことで得られる自

己効力感を、学生という時期にこれほど深く体得できたのは、まさに留学という挑戦があったからこそだと確信しています。達成体験や多様なバックグラウンドを持つ人達に囲まれて代理体験を通じて「自分にもできるかも知れない」という感覚や、これは抽象的な表現になりますが、世界の彩度が上がるような感覚を感じました。

人生のルールを一度外れる決断は、決して容易なものではありませんでした。SNSに溢れるような華やかな思い出ばかりではなく、手探りで泥臭く壁を乗り越える日々の連続でした。しかしだからこそ、私は自分ならきっとやり遂げられるという確固たる自信を体得することができました。周囲への深い感謝と、覚悟を持って選択した自分への肯定感を胸に、私の留学生活は幕を閉じます。視野が広がり、文字通り「世界の彩度が上がった」ようなこの新鮮な感覚を忘れることなく、これからのキャリア、そして人生において直面するあらゆる変化を楽しみながら、一歩ずつ前に進んでいきたいと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

sasakim@findlay.edu